



長崎西高在京同窓会ニュース

コミュニティ

東京都港区芝大門
1丁目1番26号
ニチアスビル4階
電話 03(431)5347番

長崎西高在京同窓会

発行責任者 掛川博行
編集責任者 寺井一弘

創刊号
1983年 2月



目次

創刊のことば	掛川博行	1
創刊によせて	長崎西高校長 竹下 哲	2
より強いきずなを	同窓会長 鈴木 一郎	3
在京同窓会		4
在京同窓会のあゆみ	森崎 充介	
在京同窓会総会報告	藤島 満年	
同窓会雑感	本田 洋司	
第12回生在京同期会を開催して	野口 重義	
在京同窓会に思う	石見信一郎	
一口健康メモ		9
西高時代の思い出		10
西高草創期雑感	小林 敬里	
成人式に思う	油屋 和子	
30年前の思い出	原田真砂子	
高校時代の思い出	増田 佳子	
チャイムが鳴るまで	伊藤 利和	
思い出の西高	河田 敏子	
自由投稿／うずら	後田 春紀	16
事務局だより		17
編集後記		17

創刊のつとげ



長崎西高在京同窓会々々長

掛川 博行
(四回卒)

このたびの長崎西高在京同窓会のニュース発刊に当り、一言御挨拶いたします。

長崎西高在京同窓会は、草わけの頃に、御苦労なされた皆様のお蔭で、今日の発展を見ることが、出来るようになりました。

遠く遙かな故郷の懐しさを暖め合う年一回の総会は年々、趣向をこらした催しなどがあって、本当に楽しいものです。

しかし、諸々の事情で、総会に出席出来ない方々もおられるわけです。そのような方々にも、同窓会の消息を知っていただきたいものだとかねがね考えておりました。

今回の同窓会ニュースの発行は、その希望にぴったりの企画だと思えます。

長崎のローカル・ニュースや、同窓会の皆様の寄稿などを掲載しながら、少しづつ充実させて行きたいと思っております。

皆様の御協力、御鞭撻を切望する次第です。

創刊に寄せて



長崎西高校長
竹下 哲

在京同窓会のニュース創刊、まことにうれしいことです。この「ニュース」の発刊によって、在京の同窓のみなさんの結びつきがますます緊密になり、互いに助け合い励まし合って、さらにいっそう発展されるよう願ってやみません。

みなさんの母校長崎西高は、おかげさまでいよいよ発展の一途を辿っています。職員も生徒も、いきいきとがんばっています。

さて、母校の近況をお伝えするには、昨年六月、PTA総会で話した私のあいさつが最も適当であろうと思われまので、次のその一節を掲げます。

——おかげさまで、本校も四月八日の入学式、始業式を皮切りに順調な歩みが続けておりまして、只今三十二学級、生徒総数一、四四七名という現況でございます。教職員の数は七十九名で、この四月には十七名に及ぶ人事異動を行い、県下各地から優秀な先生がた

が我が西高に駆けつけてきてくださいました。西高のよき伝統の上に、さらに清新潑刺たる気風を吹きこんでいただくわけで、私はもう胸のふくらむような喜びに浸っております。

生徒たちはいきいきとした、そして心やさしい若者ばかりで、この一年、運動に勉強によくがんばりました。

まず運動ですが、ご承知のとおり、野球部が実に三十年ぶりに甲子園に出場いたしました。有名な選手をスカウトしたわけでもなく、勉強の余暇に黙々として練習に励んだ成果でありまして、この壮挙には、みなさんとともに惜しめない拍手を送るものであります。そしてこの栄誉は、単に野球部だけのものではなくて、本校の全体师生がいっしょうけんめいに運動に励んだことの、一つの象徴的な出来事であることを思うとき、私の胸には限りない喜びがあふれてくるのであります。

次の勉強の方ですが、その一つのバロメーターである大学入試の成績を振り返ってみますと、今春卒業した生徒諸君はまことによく善戦健闘をしてくれました。その中で特徴的なことを一つ挙げるならば、生徒会やクラブで活躍した諸君の多くが、見事合格の栄冠を獲ち得たということでありまして。例えば、生徒会の役員でありコーラス部員でもあったM君、H君が揃って九大法学部に、陸上の四百メートルハードルで優勝したK君が長大歯学部、に

野球の四番バッターでファーストであったH君が長大経済学部に、そしてまた陸上に精進したT君が東大経済学部に、それぞれ合格したのであります。運動と勉強の両立を旨とす本校にとつて、まことにうれしいきわみであります。

ご承知のように、本校では夏休み等を除いて、一切補習授業を行っていません。ホテルにカンヅメして受験指導をやる、などということもいたしません。ただ、一時間、一時間の授業に精魂を傾けるといのが、本校職員の高い言葉です。だから、始業のベルが鳴る前に、先生たちは教室の廊下に並んでいます。ベルと同時に教室に飛び込んで、授業を始めるのです。

私は、勉強でも運動でも、ただ長い時間をかけさえすればいいとは思っていません。一日中机の前に坐っていたからといって、勉強したことに決してなりません。いきいきとした意欲をもって、精神を一点に集中するということが肝要です。そしてその根本をなすものは、甘えや依頼心を拒絶した「自律」の精神であると思います。(後略)——

母校の現況は、ざっと以上のとおりです。どうかこれまで同様に、母校に対するご援助とご協力を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

在京のみなさんのいっそうのご発展を祈つて、長崎からのお便りいたします。

より強いきずなを

長崎西高同窓会

会長 鈴木 一郎

(四回卒)

長崎西高在京同窓会が会報を発行されるようになりましたことを心からお慶び申し上げます。

このことよって従来にも増して会員相互のコミュニケーションがよくなり、同窓生としての連帯感と言うに及ばず、遠く故郷を離れて、日本の政治、経済、文化等の中枢である東京での諸兄弟姉のご活躍に一層の拍車がかかるものと信じております。

発行の任に当られる方々のご労苦を拝察しながらも、親しみがあり、永続性のある会報となることを期待いたしております。

さて、母校も本年で創立三十五周年を迎えることとなります。戦後の混乱期の中で、姉妹校としての東高と共に呱呱の声をあげた当時の事情を知る私共としてはまことに感慨ひ

としおなるものがあります。

すでに約二万名の卒業生を送り出し、長崎県下随一の名門校として名実共に充実発展していることは私共同窓生にとってはまことに心強く喜ばしい限りであります。

同窓生も五十二、三才となった第一回生を頂点として自律の精神に培われた多くの西高健児が社会の各分野の第一線で活躍していることは母校の発展と共に私共のたいなる誇りであります。

特に在京の皆様のご活躍ぶりは全国に散らばる同窓生の期待と賞讃の的となっております。どうか今回の会報発行を機に一層の結末とご活躍があることを心からお祈り申し上げます。



在京同窓会



在京同窓会のあゆみ

三回卒 森崎充介(初代会長)

本年度の在京同窓会総会も例年の如く、天候が幸いして一同恙なく快適な総会を終える事が出来ました。勿論、会長初め各回幹事諸兄弟の綿密なる御計画の賜と、心から感謝の念々堪えない次第です。

さて在京同窓会は何年頃から発足したのかの件に就き、皆様よりよく質問される事が有りますので、発足のきっかけからお話致そうかと思ひます。先ず二回卒田中稔章先輩より関東地区に於ける在京同窓生を探し、同窓会を開催してはどうかと、小生に話が有りましたのが昭和四十五年の秋でした。小生も現在地の浜松町にて医業を開業して約三年でしたので仲々時間も無く、それでも先輩諸氏の御協力御助力を得て一応の目安がつき四十八年十月に第一回総会の総会を開催する事が出来ました。色々な事務的不備が有りましたが兎に角、本当に皆さんが出席して戴けるものかとそれ丈が心配で心細い位でした。

でも結果的に第一回総会にしては盛況に終る事が出来ました。

その後一年一年と名簿等も充実して参りまして、昭和五十年より三回卒の本田洋司君に会長を御願ひ致し六年間もの長い間御迷惑御苦勞を御掛け致した次第です。

昭和五十七年度より三代目の会長として、四回卒の掛川博行君に御願ひ致し今日に至る次第です。

尚、一年毎に会の内容も立派になり各回特に最近は十回卒以下の幹事さんの御努力には、深く感謝する次第です。毎年の総会に御出席戴く母校々長他来賓の方々にも大変喜んで戴いて居ります。

今後益々、在京同窓会の灯を消さない為に皆々様の御健康に御留意の上諸兄弟多数の御参加を希念して止まない次第です。

雑文平に御寛恕下さい。

昭和57年度 長崎西高在京同窓会総会報告

十回代表幹事 藤 島 満 年

一、期日 昭和五十七年九月二十五日(土)午後

二時より

一、場所 日本工業倶楽部

一、会費 男八、〇〇〇円 女六、〇〇〇円

一、参加者 一六二名

一、来賓出席者 竹下哲校長、佐藤晃嗣前教諭、鈴木一郎長崎西高同窓会会長以下三名長崎より参加される。在京関係として、ビードロ会会長反田邦治様、瓊中会より大久保様、長中会より槁田様、東高在京同窓会より吉田様等在京同窓会総会も昨年は九回生の当番でした。今年も十回生の当番幹事となりました。まず会場、期日等を協議した結果、日本工業倶楽部に交渉する。長崎県人会でも利用していることもあり、担当の兵頭課長も好意的に協力の確認を得て、期日は九月二十五日(土)とする。

幹事会を開催致して、本年度の総会の要領について諒解を得る。担当幹事は、毎年順送りとなっているため、担当幹事の順番が近くなると、果して前幹事と同様にスムーズに運営出来るだろうかと不安になって来ます。九回生は後田幹事長を中心にチームワークがとてもしっかりと居り、我々十回生も九回生に負けなように全力を尽すことになった。

今年も、掛川会長の考えも、総会迄に消息

不明の同窓の人を少しでも見つけ出そうと云うことで、案内状の返信の宛先を事務局一本に纏めました。従来、各年度の幹事に宛先をお願い致し、出欠の把握も各年度の幹事が遂行していましたが、今回は、十回生が担当することになり、出欠の有無を集計する度に各幹事に状況を報告致し、一名でも多くの出席の要請を行い、消息の判明した人には、すぐ案内状を出し、名簿漏れをチェックしました。総会の時、演出効果を盛り上げるために、オークションを行うことに決め、その準備(商品購入)に着手する。十回生の阿武屋君以下女性のメンバーでスタッフを組み、当日は格安に提供出来る体制になりました。いよいよ当日である。長崎からも竹下校長、佐藤先生鈴木会長もすでに到着、東京は当日午前中、大雨でしたが、予期した参加者でした。

オークションも大盛況でした。その収益金も長崎水害義損金としての一部とすることに致しました。

佐藤先生が長崎西高は永遠ですと最後に結んだ言葉がとても印象的でした。竹下校長も非常に善人で居られました。集り散りして人は変わろうとも、出合いを大切にして行きたいと思えます。

同窓会 雑感



本田洋司
(三回卒)

同窓会は、楽しいものである。毎年、春や秋になると、各種新聞の案内欄に、決ってどこかの同窓会の「お知らせ」が載っている。その「お知らせ」を見てみると同窓会での様々な情景が泛んでくる。

何十年かの時の流れを、それは瞬間にして逆行させ、隣りの太郎ちゃん、花子ちゃんに引戻す不思議な力を持っている。往時の悪童連中が一堂に集って昔話に花を咲かせている光景に、ついつい微笑ましくなつて了う。

昨年、西高卒業以来実に、三十一年振りであった同級生がいた。実に、いい男になつたなアと思つた。彼は旧制長崎中学、西高を通じて常に長崎市内の番長格として勇名を馳せ、他校の悪戯鬼共にも一目置かれた男だつた。今日でいえばさしづめ堂々と表番を張つた輝ける存在？だつた。よくあれで退学にもならず卒業出来たものだと思う位であつた。が、三十一年振りで会つてみて、人相風格社会的地位、実に申し分のない、快男児になつていた。これは驚きであり同時に又愉しみではある。同窓会では、こんないい男に必ずといつていい程何人か出会う。私はそれが愉しくて出掛けてゆく。

又或る時、同期の女性からこんな話も聞いた。制服に纏わるエピソードである。

生徒達は男女共制服着用であつた。それらは何の変哲もなく、全員同じ服装であつた。と今まで信じて疑わなかつた。ところが、豈図らんや彼女達は制服という狭い枠の中で、実に沮ぐましい努力をして、如何におシャレを愉しんでいたか。白く、スカートの丈を他人より長くしたり、短かくしたり、襷の数を

増やしたり、上衣の裾を詰めてウエストを細く見せようとしたり、等々。そんなに気を使つていようとは知る由もない女生徒の生態度はあつた。何しろ、全員同じ服装にしか見えなかつたのだから。

そう云えば、我々男子生徒にしても、新しい帽子を恥かしがつてわざともみくちやにし、卵の白味やポマードを塗つたくつてテカテカにする者や、ズボンに寝押しをしたりする者などそれなりの工夫に余念がなかつたア、と思う。それもこれも立派な自己主張だつた。こんな懐かしい話に時を忘れるのも、同窓会ならではの愉しさであろう。

しかし他方、こんな話もある。いつであつたか。或る恩師から「同窓会に出たくとも出られない人のことも考えろよ」と云われたことがあつた。その通りである。大勢の中には、不幸にして今、病を得ている人、会社が倒産し失業中の人、夫や子供やその他様々な悩みを持つ幾多の元仲間達がいる筈であつた。是非もないことかもしれない。が、せめて今年も、一人でも多くの元子供達が集つて、あの頃のような無邪気な他意のない心を寄せ合いたいものである。そんな楽しい同窓会を、老いて朽ちるまで続けてゆきたいものである。

昨暮十二月二日(木)に我々十二回生同期会(場所・田赤坂離宮裏北側 日本生命倶楽部)は、在京約三十余名中十四名(内女性四名)及び先輩三名の臨席を得て開催された。

もともと、本会開催のキッカケとなったのは、実はその三ヶ月前開かれた在京同窓会(日本工業会館)に出席した十二回生が必ずしも多くなかったことと、さ来年(S五十九年)開催の在京同窓会で十二回生が当番幹事となる予定もあってとにかく、切角のこうした機会に一人でも多くのメンバーと再会し度いということを取り敢えず忘年会をかねて年末に一度会おうではないかと誰からともなく意見が出て、今回の同期会開催の運びとなった次第である。

何はともあれ、お互いに忙しい身であり、誰かが音頭をとって、事を進めなければならぬこの種の催しである事には違いない。

幸い、我々十二回生の中には、現在、弁護士をしていて、在京生活も長い寺井氏がおり、彼をキイとして、近くでトラベルサービス会社を経営している吉田氏、そしてたまたま会場関係を受持った私の三人で名簿を元に、各メンバーへの電話にての参加勧奨から動いていった訳である。

斯くして、不十分な準備乍らも設営に運んだ標記同期会は、思ったより多数の参加を得、冒頭から出席者個々に「ヨク今度ハ、コゲン機会バ設営シテ貰ウテ、ホンナコテ 良カッタイ、イヤ、皆ンナト会エテ、ナツカシ

カー」の声が聞け、設営した者の一人として、「コゲンウレシカコトワ、ナカー」と、しみじみと嬉しさがこみあげて来た。

聞くところによると、在京同窓での同期会は、これが久しぶりである由。今回をベースとして次回以降益々充実し、一人でも多いメンバーの参加に結びつくことを祈る次第であ



長崎西高卒業第12回生 在京同期会を開催して

野口重義(十二回卒)

る。今回集まったメンバーは、公務員、自由業、会社経営者、サラリーマン、主婦業……

正に夫々の分野で頑張っている職業社会の縮図ともいえる顔々で、母校長崎西高を卒業して以来二十二年余の熟年の集団なのである。

しかし、極めて、当然の事ではあるが、気持は母校在学当時と何ら変ることなく、正に

気心の合った、何の遠慮もない、同じ故郷を持つ「友達」であり、例え故郷を遠く離れていても、片時も「長崎」のことを忘れたことのない輩である。それは、言葉に、顔に、いつ果てるとも無い様な歓談に花が咲いた訳である。

古来より、「幸につけ、不幸につけ想い出されるは云々……」というが、我々にとつて正に昨年、そのいづれを言い当てられた様な一年であったと思う。湧きに湧いた「三十年振りの甲子園出場『長崎西高』と、あの「未曾有の長崎大水害」……しかし、我々は、これらのすべてを、唯、あつそんなことがあつた……丈でなく、教訓として、今後に雄々しく前進していかなければならない——そして、それは決して一人では出来ない。常に一人でも多くの仲間と声をかけ合い乍ら、仲間の力を借り乍ら、より良いものにして行こうとする努力が大切であることは、今更申上げる迄もないことであろう。その、一つのキッカケが、同窓(期)会であり、それに参加しているこうとする気持ではなからうか?と私なりに感じている。この世の中で大切なものは、沢山あると思うが、最も大切なもの——それは「友」では無からうかと私は思う。

やがて、社会に巣立っていく西高在生にも伝えたいことは社会に出て周囲にはかなりの変化が起るであろうけど、人の「心」を大切にすれば、きっとその人は必ずや「友」となっていくだろうということである。

在京同窓会に思う

八回卒 石見信一郎

西高を卒業して、早いもので二十七年が過ぎました。すっかり東京での生活が身に付いてしまいましたが、故郷はいつまでも懐かしく、時折テレビ等で九州弁を耳にすると、一時、長崎弁を使って、子供達に笑われたりする程です。

幸い両親共、故郷で高令にもかかわらず元気ですので、帰崎するのが楽しみです。思う様に実現出来ず残念です。

帰崎の折は、野球部の斉藤前監督とは、中学、高校と野球部で共に甲子園を目指した親友ですので、必ず母校にも立寄り、我々が実現出来なかつた夢を、後輩に託したものです。一昨年の三十年振りの甲子園出場は、永年の夢が実現し、在京同窓会もバスをチャーターし、多数応援に駆け付け、後輩の進学校らしいさわやかな健闘と、応援団と共に校歌を力

一杯歌う事が出来、胸が熱くなりました。又、何時の日か、今度は勝つて校歌が聞ける事を楽しみにして居ります。

扱て、在京同窓会の現況ですが、毎年秋、長崎から校長先生、懐かしい恩師他、多数を招き、盛大に総会を開催して居り、私も毎年楽しみに出席している一人です。

毎回二百名程の出席者があり、中には卒業以来の懐かしい顔もあり、この日ばかりは仕事的事も忘れ、学生時代に戻り、二次会、三次会と昔を語り、懐かしみ、本当に楽しい一日を過ごす事が出来ます。

毎回卒業順に、幹事を務め、それぞれに趣向をこらし、総会を盛り上げます。今秋は十一回目で、十一回生(三十四年卒)が担当します。

私も三年前、八回生の幹事をして居りましたので、同期生の協力で、盛大な総会を無事完了する事が出来ました。七回生から引継ぎ、総会迄の一年間は、その準備で大変苦労しました。その上に以前から懸案となっていた同窓会の名簿作りを引受ける事になり、尚一層大変な一年でした。十九年のサラリーマン生活から自営業をスタートして二年目で、色々大変な時期でしたが、編集員の皆様方の協力により、総会の席上で会員の皆さんにお渡しする事が出来、喜んでいただき、本当に良い事をしたと、今では懐かしく思われます。

その時の苦労話を少しさせて戴きますと

同窓会の運営上、きちんとした名簿の必要性は、皆解っていても、いざ作成となると、費用、人、時間等の問題で具体化せず、うやむやになってしまいがちです。前年から幹事会の席上、何処かで具体化せねば出来ないと思つて、その経過を見て居り、翌年我々が当番幹事となり、総会の準備と開催、その上に名簿作成と、両方では無理で、当初は我々八回生は総会の準備に全力を投入し、名簿は他に任せるつもりで種々検討しましたが、各幹事共、多忙な人ばかりで引受け手がなく、結局、私がいち切つて引受ける事にし、事務局となり、編集委員会の設立、広告による必要経費の捻出、日程化等、立案し、幹事会に計り了承を得、スタートしました。

一番の心配は広告料による費用の捻出と、幹事が決定して無く、空白になっている名簿の整理でした。費用の方は十五回生迄に割当てた広告のノルマは、各回幹事の方々が中心になって努力をされ、自ら広告主になっていただいたりして予定以上の広告が、日程通りに集まり一安心しました。我々八回生も一人で八回生のノルマの三倍もの広告を集めてくれた強力な仲間のお蔭で、当番幹事の面目を保つ事が出来、皆さんの力強い協力に頭が下りました。

次に一人でも多くの会員を載せるために各回の幹事に編集委員になっていただき、責任

をもって同期の名簿をまとめていただきました。良くまとまっている年度は、多数の正確な名簿が出来ました。前回迄、空白になっていた所も、連絡を取合つて、幹事の依頼と名簿の整理をお願いし、何とか空白の無い様にする事は出来ましたが、若い年代では我々の要望にも理解を得られず、がっかりした事もありましたが、十年、二十年過ぎ、我々の年代になると母校が懐かしく思え、同窓会にも出席して貰える様になると思います。

約千二百名を載せる事が出来ましたが、未だ多数の同窓生が、各所で活躍されている事でしょう。次回作成の折は、もっと充実した名簿が出来ると思います。

私も三年間の幹事役を無事終え、自営業に全力投球中で、今秋の総会を今から楽しみに頑張つて居ります。

名簿作成に当り、御協力いただいた、本田前会長、編集委員長を引受けて下さった宮崎先輩、各幹事の方々、それに第一回の名簿作成で基礎作りをして下さった先輩と、我々の主旨を理解していただき、心良く広告を出していただき、立派な名簿にしてくださいました。告主の皆様方に再度、お礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

最後に、年に一度の総会に、学生、若い会員の多数の出席を要望し、在京同窓会の今後益々の発展をお祈りします。

以上

年令と睡眠時間

年をとると睡眠時間が短くなると云うセリフを良く聞きます。クライマンという学者の説ではエネルギー消費量の少い人は疲労を回復する為の睡眠時間は短くても良いと云う事です。年をとると何もせずブラブラしている人が多い。もともと若い人にもそんな人を見かけますがね。人間の脳は七十才に

なると男
10%女五
%も軽く
なると云
われます。

事実刺

激がない
と脳の神

経細胞は縮んでしまいます。読書でも盆栽でも何でもよいから、趣味を持たせ刺激を作る事です。



ウナプロ等の高温浴は大量の発汗がある為かなり効果が期待されます。ただし危険を覚悟して入る事です。二日酔いで全身が疲労して脈拍数も平常をはるかにオーバーしています。それ丈心臓に負担がかかって居りますから、脳貧血等を起しかねません。特に飲酒直後のサウナプロは絶対に禁物です。

厄年

厄年って本当にあるのでしょうか。男二十五才、四十二才。女十九才、三十三才が厄年。中でも男の四十二才と女の三十三才は大厄と云われています。厄年の由来は中国の陰陽道にあるらしい。特に

男の四十二才は人生の筋目でもある。社会の中核として最も多

忙になる時に肉体的衰えが現れ、動脈硬化等各種の成人病が一举に襲いかかって来る。つまり、厄年は健康に注意する筋目と考えてはいかがでしょう。少くとも一年に一回は健康診断を受けましょう。

(森崎記)

二日酔

二日酔いの解消策として入浴する人も多いようですが、実際には余り効果は有りません。逆に血液の循環が良くなる為二日酔いがひどくなる事すら有ります。その点サ

西高時代の思い出

西高草創期雑感

四回卒 小林 敬里

昭和二十三年十月の学制改革により、旧制中学の、長中、瓊中、県立女学校、市立女学校、の四校を統合、それを二つに分けて、東西両高等学校が創立した。

他は定かではないが、小生の住んでいた大浦は、大浦川を境に西と東に別れた。東高は県立女学校の校舎へ、西高はもつと東にあった鳴滝の長中（現長崎女子短大）の校舎へ。旧制中学最終の吾々四回生は、当時中学三年生のなかば、それにはみ出してしまい、長崎県立東西高等学校併設中学校という正確に想い出すのにちよつと時間がかかる名の中学に収容された。

男女七才にして席を同じゅうせず、の戦中の教育を受けて始めての男女共学、とまどいの中にもそれぞれ楽しい思い出もあった。その時、担任の先生が塚原先生であった。その頃塚原先生は、先生になられて間もなく、時

には和服で楚楚として、少し太めではあられたが清少納言はかくやという風情でした。先生に少しでもかまってもらおうと国語の苦手な小生などは掃除の時、雑巾がけ中、先生の目の前で、頭にバケツをぶつけてひっくり返してみたり、天上裏に昇ってさわいでしかられたりして、たわいなく喜んでいたものだ。それも五ヶ月で卒業、晴れて西高へ入学、

鳴滝の校舎へ。その頃印象に残っているのは、長中は男子校、そこへ多数の女生徒が入ってきた。わずかな女子用トイレにいつもづらーつと並んでいた。とうてい十分間ぐらいの休み時間では皆できなかったであろう。できなかった人はどおしていたか、今でも気がかりに思っている。

入学後約二ヶ月、一年生の男子全員と、家庭科をとらなかつた少し男っぽい女子若干名、西高生として始めて、原爆に被災した、瓊中の趾地、竹ノ久保へ！

そこには二階建の木立の新らしい校舎が一棟、忽然と、と云う感じで、あたりは原爆の

趾も生々しく、ガラスと瓦の破片が一面、グラウンドは芋でも作ったのであろう、畠のうねりが踏みかためられ、でこぼこで使用できる状態ではなかった。二階にA組からG組迄七教室、体育は隣の鎮西のグラウンドへ走って（当時活水はまだ来ていなかった。）夏休みには各クラスが五十メートルぐらいづつ分担してガラスの破片などを拾い整地し、この年の秋になってようやくグラウンドが使用できる様になった。

当時はまだ上級生がやたら威張っていた時代で、上級生のいないところで安住の地をみつけた思いで、のびのびとした毎日だった。それでも時には上級生がやって来て、集められ「おまえたちたるんでいらず、しっかりせい」と言う説教をおとなしく聞いていたものだ。小生はこの時D組。このクラスは始めはだいたい真地面なのが揃っていた。それがいつの間にか極端に差ができて来た。その原因はD組にあった。七組のうちD組は真中だ。その窓のすぐ下に玄関の屋根がせり出してい

た。先生が黒板に向っている時、窓から飛び下り極づたいに遁走する。非常にスリルがあつておもしろかった。小生の前の席にいた、今千葉市会議員をやっている、松井君などは一番多く飛び下りた口だったろう。

とにかく学校に行くのが楽しくてしようがなかったが、余りしんげんに勉強した記憶はない。二年生になり又一時鳴滝の校舎へ。夏休みが終った頃、三年生と二年生が新装なつた竹の久保へ。一年生が来て全員揃つたのは、三学期に入つてからだつたと思う。

吾々四回生が三年生になつた時、その波乱に満ちた環境が仲間意識を育み、母校愛となつて、いつきに花開き、特に運動部では、野球部の春、夏の甲子園出場、春は準決勝迄戦進み、夏はその実績を買れて、優勝候補に推された。又サッカー部、ラグビー部、バスケット部の県大会優勝と、驚異の西高黄金時代を築き上げた。あれからちょうど三十年、昨年、関西同窓会発足にかけつけた時、当時野球部の三塁手で、スター的な存在であつた福島君（彼には各地からファンレターが来ていた）に逢つた時、新生西高の伝統をつくる為、自分等野球部がしんげんに練習したら少しでも他の部の刺激になるであろう。と思つて頑張つた、それが甲子園行きにつながつたのだと云う話を聞いて、非常に感慨深いものがあった。

成人式に想う

十一回卒 油屋和子(旧姓・中田)

一月の初め、長男宛に成人式の案内が届いた。「出席するの。」の間に「行かないよ。」と実にあつさりと言えが返ってきた。前々からそれとなく感じていたことで予想された返事ではあつた。自分の意志で決めた事で、強制して出席させる事もないと思ひ乍ら「どうして？」と言いたくなるのを押えた。そしてふと自分の昔の姿を思い出した。朝夕通つたあの有名な遅刻坂、お世話になつた先生方、多くの友人達の顔、皆それぞれ懐しく長崎を遠く離れていると一層それが強く感じられるのである。三年程前、本当に久しぶりに西高を訪れたが、新しい建物が建ち変つてはいたが遅刻坂とグラウンドの隅の運動部の部室だけは昔のまま、大変感激した事があつた。そしてその西高を卒業し二年後の成人式の事等、青春の日々に思いを馳せた。

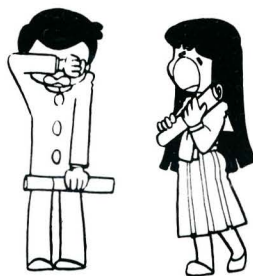
やがて一月十五日。成人式の日、街には晴着や背広姿の新人があちこちに見られたが、我家の新人は試験が近いとかで勉強中である。というところカッコイイが普段はテニスなどで明けくれているためいざ試験となると大変なのである。さてその夜の食卓は、ささやか乍ら鯛とお赤飯で祝い、賑やかに更けた。お

酒のみ乍らの話によると、先日大学を停年退職される教授の最後の授業があり、その後の謝恩会が大変すばらしかつたそうである。多くの卒業生、先輩が出席されて大変感動的な会であつたとか。「あれが僕の成人式だったよ。」とむすこは言つた。成人式には出席しなかつたけど、心に残る貴重な体験が出来て本当に良かったとしみじみ思つた。こうして一歩一歩成長して行く長男の姿を見て、三年後には長女も成人となるが、この子はどんな成人式を迎えるのかと、ちよつぱり不安と期待が心を過つた夜でした。



30年前の思い出

五回辛 原田真砂子(旧姓・森)



長崎を離れて二十五年想い起せばまず夜の
大波止の棧橋が目に見えぬ。当時立神に住ん
でおりまだバスも通ってなかったので中学、
高校と船通学であった。帰りが遅くなると対
岸の街の灯や上り下りする船の赤や青のゆら
めきが波にのって足元迄とどいた。学校の行
き帰り色々な想いを込めて佇んだ場所だ。昭
和二十五年四月鶴鳴中学を出て晴れて入学し
たのはデコボコ廊下の古い鳴滝の校舎であつ
た。そこには一学期間だけしか居なかったが
何かをやりたかった矢先、廊下の貼り紙を見

てガールスカウトの事を知り十名程の有志で
団を結成し活動を始めた。岡先生との出会い
である。先生は活動的でその姿勢はいつも社
会に向けられ向上心にあふれて私達にも大き
く目を見張って世界を見る様話され孤児院や
養老院等あちこちつれ歩いて下さった。体操
の先生だったので音体部入りをしておかげで
三年間体育館の虫になった。二学期から竹之
久保の新校舎に移ったが向い側の丘の上に小
学校からの友達が行っている活水高校があつ
たのは嬉しかった。昼休みになると互いの中
程にある軽食屋に降りて行きおしゃべりした
り仲間のS子と我が野球部員との手紙の仲立
ちをしたりした。デートの模様をあれこれ聞
きたくて昼食もそこそこに登り降りしたが野
球部が卒業するとその楽しみもなくなった。
二年になって打ち込んだのはダンス(音楽体
操)である。大きくふくれ上ったブルマーに
白い半袖シャツでタンバリンに合わせて毎日
柔軟体操に精を出した。体育館内ではバスケ
ット、卓球、音体、機械体操とそれぞれ四隅
を陣取って練習していた。少し疲れると坐つ
てバスケット部員の飛び散る汗と床のきしみ
を聞き乍ら清々しい気分になるのだった。音
体部は毎年三菱会館で行なわれる予餞会に出
演した。一年の時には上級生と大勢で体操を
し、二年では自作自演の「別れの曲」でシー
ツを縫い縮めたロングスカートに白いブラウ

スとバレリーナ気分満喫の四人であった。此
のグループは三年になっても踊った。黒の上
下に浜の町で見つけた四つ葉のキラキラ光る
ブローチで「荒城の月の変奏曲」である。別れ
の淋しさと未来への不安がつのる思いで踊つ
たが幕が降りた後緊張と悲しさでしばらく
声ふるえた。三年九ホームの受持は後に校
長先生になられた林田先生であった。その頃
の先生はボサボサ髪に白い上っぱり芒洋とし
て頼りになりそうでなかったが人の噂では手
に負えない連中の集まりだから彼でなくては
と云う事だったので時々級をそつと見廻して
見たがどの顔もそれなりの顔つきをしていて
誰がそうなのか私には見当もつかなかった。
卒業が近づくにつれ、ひそかに憧れる人も出
来て心穏やかならぬ日々が続いた。念入りに
ひだスカートにアイロンをかけセーラー服の
脇をつめウエストを細くしたり、クリップで
髪の毛を鉄カブトの様に巻いたりしても自分
が小さく見えてみじめになるばかり。或る日
ホームで先生は「子犬の恋」の話をなさった。
「現在君達が恋愛と思ひ込んでいるものは本
物ではない。子犬がじゃれ合っている様なも
のでそんなものは何回やってもどうと云う事
はない。本当の恋愛は大人にならなくては出
来ないものだ。」何だか肩の荷が降りた様で少
し安心したのを覚えている。卒業後も就職の
事で先生にはお世話になった。



高校時代の思い出

十三回卒 増田佳子(旧姓・三澤)



私が西高へ入学したのは昭和三十三年、終戦の年から十三年経っていたことになりました。その頃には、原爆の傷跡も殆んど片づけられて、表面的には街は平和に見えましたし、しかも、十三年は自分の人生の大部分にあたっていたわけですから、戦後になって経た時間を、大変長いもののように当時は感じていたと思います。——ところが、もう、その頃から二倍にもなる、二十五年もの歳月が流れたわけですから——まるで、夢のようです。

遅刻坂をのぼって、はじめて校門をくぐった日から、卒業して、裏門の下にあった「西川屋」のおじさん、おばさんにもお別れの挨拶をした日まで——なつかしさはひととおりではありません。

私は新聞部員で、昼休みも放課後も、たいてい「アパート」——なつかしい方が多いでしょう——と呼んでいた文化部の部室で過ごしていました。広い教室を板で仕切って戸をつけた、安アパートといった風情の部室群で、そこに入居していたのは、電工部、生物部、地学部、文芸部、写真部、演劇部、わが新聞部

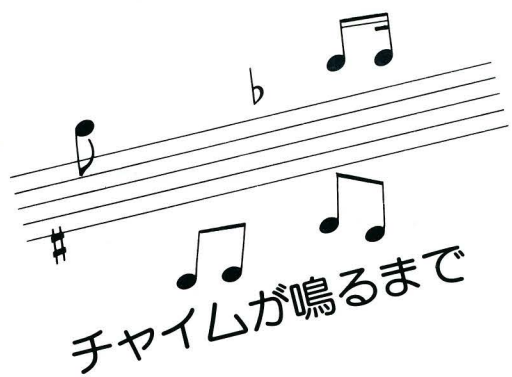
など。板一枚の隔てですから、部同志の交流も盛んで、文化的にはわりに質の高い雰囲気があり活気にあふれておりました。

そのアパートの仕切りが、学校の方針で取り払われることになったのは、二年生の時でしたでしょうか。反対運動もあり、新聞部では「抗議文」を作って、私も先輩についてそれを学校中にはって回ったりしたことを思い出しますが、覆せなかつたわけです。それから幅広いところにポツポツと机が配置されただけの部屋で、なんとも落ち着けず、活動もやりにくく、くやしい思いをしたものです。

高校の予備校化が問われたり、そういう意味では、「灰色の高校生活」などと言われる一面もあつた当時のことで、文化部の活動などが活発になることは、むしろ、学校としては喜べないようなこともあつたのでしよう。そういえば、文化祭も、私たちの時代に三年に一度しか行われなくなつてしまつたのでした。現在の西高では、どのようになっているのでしょうか。

しかし、そういう苦^くさも含めて、日常の学校生活、授業、体育祭等の行事、もちろん部活動にも、西高での月日は、まさに、語り尽くせぬ青春の思い出に満ちています。

今の私をそこまで返してくれると言うのなら、何はさておいても戻りたいと心から思います。



三十回卒

伊藤利和

今、後期試験の真際中である。教壇の上立ち試験監督をしているのであるが、何ぶん手持ち無沙汰である。窓の外を眺めていると、学生時代の事を思い出す。五年前までは、ツメ襟に身を包み、一夜で潰かりきれなかつた代物を引張り出すのに苦勞したものだ。ベルが鳴るまで趣くまま、ペンを走らせることにしよう。

思うに、男友達とは実にいいものである。東京—長崎と遠く隔れていても、電話一本ですぐ学生時代に戻れるのである。そして飲みながら話すことは、必ず高校の思い出である。例えば文化祭では、出し物に火山のモデルを……とのことで、受験という事も忘れて没頭したことである。この一件では、当時先生方

には知られずに済んだある事件がある。それは予備実験も最終段階のことである。本に載っている調査に、他の薬品を混入し、火力の強化を計っていたわけである。その調査中に発火し、もの凄い火柱と共に私の手を炭と化してしまった。つまり我身をもってこの火力を知ったのである。父の車ですぐ大学病院へ連れられ医師から、手首から先の神経がマヒするかも知れない、と聞かされた時は、顔から血の気が引いてしまった。学校へ行くと、包帯をぐるぐる巻きにした手を見て、どうしたのか、とよく先生に尋ねられた。天ぷら油をこぼしました、と平然と答える。と、クラス中の者が意味深な笑いをするのである。あの事が発覚でもしたら、クラブや顧問の先生に迷惑がかかる、と必死に気付かれぬ様努める方にかえて、気を遣ったものである。両親などは、あんなに言っても聞かないのだから自業自得だ、と言っていた。しかし、ガールフレンドだけは親身になって心配してくれたのである。

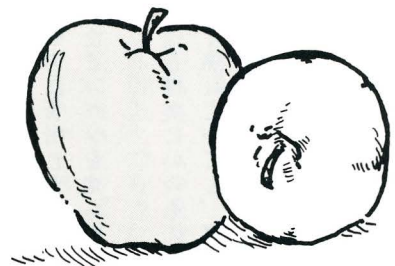
五年経った今、その時の跡もすっかりなくなり、昔大ヤケドした、と人に言っても信じてもらえない程である。また、お前が彼女をモノに出来たのは、あのヤケドのお陰だ、と言って冷やかされる。今では、女房となった彼女に叩き出されて仕事に行く毎日である。卒業式当日、学校に来ていながら、ばかばか

しいと言って教室で悪輩とトランプに興じていた私だが、学生には、「卒業式にはちゃんとして出とけよ！」と言っている。

高校時代の思い出、数え挙げればキリがない。そのどの場面も鮮明に覚えている。国語や数学や、流行歌よりも印象深い事である。さあ、席を立って教室を一廻りすればチャイムが鳴る。



高西の思い出



二十八回卒

河田敏子(旧姓・中浜)

西高の歴史も、今年で、三十五回生を送り出すまでとなり、年々、同窓生の仲間が増えて、喜ばしい限りです。全国各地、それぞれの立場で、皆様、御活躍のことと伺っております。在京同窓会では、幹事の方々の御尽力により、毎年、在京同窓会誌が発行されることになりました。私も、この会の発展とともにかけながら、そして心から祝っております。

私は、今から七年前、昭和五十一年に、西高を卒業いたしました。私自身、あのころと少しも変わっていないつもりですが、さすがに、あの紺で胸元にリボンのついたセーラー服は似合わない年令になってしまったようです。

私が、通いましたころの西高は、現在の新しく立派な体育館こそ、まだ建てられてあり

ませんでした。が、何不自由のない恵まれた環境であったと覚えております。その中で、受験の重圧をひしひしと感じながらも、課外活動、生徒会、体育祭、文化祭などと、青春をのびのびと謳歌していたのではなかったかと思えます。

なかでも、体育祭のにぎわいは、当日もさることながら、その準備に、朝は、早くから休み時間、放課後、そして、男子生徒は、徹夜の作業も辞することなく、一方で、女子生徒は、差し入れづくりに励んだことなど、クラスが一体となり、全精力を注ぎ込んだところが、今も鮮かに思い出されます。

また、課外活動で、バドミントンをしばらくやっていた私は、三角屋根の古い体育館には、格別の愛着があります。中で、ハトが巣をこしらえていて、我もの顔に、飛びまわっていました。その糞をよけながら、寒い日も暑い日も、時には勉強を犠牲にして(?)シヤトルを追いかけたものでした。あの体育館には、私たちの若々しい汗がしみこんでいるのです。

生徒会の総会では、全校生徒が体育館に集まり、「外出時には、私服でもよいのではないか。」などという議題について真剣に話し合ったりしました。

今、ふり返って考えると、あらゆる面で、生真面目で、活力に満ちあふれていたことが

実になつかしい思い出です。

それから、西高の先生方は、どなたも個性豊かでいらっしやいました。先生方のまねをしては、笑い転げてばかりでした。そんなある日、浜口のバス停で、あの英語の佐藤晃嗣先生と目が合ってしまった。はずみがついていた私は、ついその日のユニークな授業の一コマを思い出し、笑ってしまったのですが、もちろん、それが一度ではなかったのですが、ついに、先生は、バスから降り際に、わりばしのふくろを渡されたのです。それには英語で、「どうして、私の顔を、見ると、よく笑うのですか。」と書かれてありました。若かったとはいえ、ほんとうに失礼きわまりないと、今でも赤面します。おそらく、あまりできのよくない生徒に、英語を少しでも好きになるようなきっかけを、与えようとお考えになったのかも知れません。これは、困ったと思っただけで、便せんへたな英語で、弁解の返事



を書きました。その文章が文法的に正しかったか否か、都合の悪いことは、すべて忘れてしまいました。が、二つ目のわりばしふくろの返事をいただいた時に、「市川房枝さんのような女性になりなさい。」と言ってくださったことが印象的でした。

高校を卒業してからの私は、一浪後、東京で大学生活を送りました。初めて、親元を離れ、西高を、そして長崎を外からながめることができました。帰省のおり、見なれた町並が、目に映った時の、言いようのない感激は忘れられません。離れて初めて、故郷を知ったと言うべきでしょう。

その後、いろいろな思い出をつくりましたが、卒業と同時に、望み通り、教職につき、そこでまた、教えることの困難さ、先生方の苦勞を、しみじみ知りました。そして、現在大学時代に知り合った主人と結婚いたしました。ごくごく平凡な毎日を送っております。

おそらく、再び長崎で暮らすことはできないだろうと、覚悟して、出て参りましたが、すっかり離れてしまうと、なおさら、心ひかれるものです。そう言った意味で、在京同窓会の方々も、時を同じくせずとも、伝統ある西高の、伝統ある長崎の人間として、心を結びあっているのだと思うのです。

これからも、末永く、この会誌を通して、結びつきが深まることを、願っております。

うずら

九回卒

後田春紀

わが家にはうずらが一羽いる。これは娘が学校の先生よりいただいたつがいの中のうちの一羽である。他の一羽は庭に置いた籠に移すときに逃げてしまい、運悪くつないでいた犬のところへ行き、踏みつけられて死んでしまった。

つがいであるときは卵を全く生まなかったせいもあって性別が判らなかつたが、一羽になってしまつて淋しいだろうと思ひ、両手で軽く抱きしめたり、ひっくり返して腹を上にしたりして、スキンシップをしたところ、人間に対して警戒心がなくなつたのか、ある日から突然卵を生むようになり、それで残つた一羽がメスと判つた。今迄に毎日ではないが月に大体二五個位は生んでいる。

日中は猫からうずらを守るために、犬の鼻先に籠を置いている。うずらは体のおい、汚れを砂浴びして落す習性があるため、籠に砂を入れてやると、翼をうまく使つて器用に砂を体の上の方に巻き上げたり、ねころんだりして砂浴びしている。砂浴びの後には

はなくなつてゐる。

うずらは鹿島立ちならぬ、うずら立ちといつて一気に二、三メートル位の高さまで飛ぶことができるが、翼が貧弱であるため連続して飛ぶことができず、逃げ回つても簡単に手づかまえることができる。わが家では時々部屋に放し飼いにしているが、あちこち飛び



回るのではなく、走り回つてゐるといつた方がよい。ただ、よく糞をするのには閉口するが、のべつまくなしに食べているので仕方がないことと諦めている。

このうずらも一度庭の籠に入れるときに逃げてしまい、うずら立ちをして塀の外へ行つてしまつたことがある。近くにゐると思つて散々娘と一緒にさがしたが見付からず諦めて家へ帰つた。逃げてから三時間位して暗くなつてから、庭にゐる犬が余りほえるので行つてみると、うずらが籠の置いてあつたあたりに帰つてきてうずくまつてゐた。外に逃げたはいいけど、餌はなく、いつ猫に襲われるかも知れず、不安になつて戻つてきたのだろうと思うが、暗い中（うずらも鳥目？）をよく

戻つてきた、可愛い奴だということ、わが家の待遇が一段と良くなつたことは当然のことである。

今では家族の者が籠の側に行くときすり寄つてくるし、朝籠をのぞくと大きい声で鳴いて挨拶(?)をするようになった。勿論スキンシップも相変わらず続けているが、赤塚不二夫の飼猫の菊千代スタイルとまでは行かないが、腹を上にして足をのばしたまま手の中でまどろむこともしばしばである。

うずらを飼つたのは始めてであるが、可愛いもので、家族の者もうずらの方へ気が移つてしまい、元来やきもちやきの庭にゐる犬は余りいい顔をしてゐない。

編集委員募集

長崎西高在京同窓生の豊かな交流と在校生との固い絆をさらに深めていくため「在京同窓会ニュース」をひきつづき刊行していきたいと考えています。そのためには、一人でも多くの人の知恵と力が必要です。この「ニュース」刊行の趣旨に賛同し、御協力いただける方はどなたでも結構ですので左記まで御連絡下さい。

〒105 東京都港区西新橋一―二一八

弁護士ビル二一〇号室

電話

〇三五〇三二八七六一番

寺井一弘

事務局だより

一、現在の長崎西高在京同窓会の組織体制は次のようになっていきます。

会 長 掛川博行(四回卒)
副会 長 小林敬里(四回卒)
常任幹事

渉外担当 今村礼二(五回卒)
企画担当 狩野祐光(六回卒)
財務担当 後田春紀(九回卒)
組織担当 藤島満年(十回卒)
広報担当 寺井一弘(十二回卒)
顧問 森崎充介(三回卒)
本田洋司(三回卒)

この他、各回卒毎に、幹事があります。
二、長崎西高在京同窓会名簿(一九八〇年秋作成)がございますので、もし必要な方がおられましたら、事務局まで御連絡下さい。

三、又、この名簿に記載もれの方の御消息をご存じの方、住所変更のある方も随時御連絡下さい。

四、一九八三年度の在京同窓会総会は、今秋に予定していますが、詳しくは追って御連絡さしあげます。

☆長崎西高同窓会「ニュース」創刊号をお届けします。昨年十二月、幹事会が開かれた際に、この「ニュース」刊行の話が出て、ついでは、母校の卒業式に間に合わせたらどうかということになり、正月をはさんでの突貫工事のような仕事になってしまいました。そのような次第なので、果して、どのような出来栄なのか、不安ではありませんが、ともあれ、長崎西高の思い出と故郷のかけがえを皆様方にお伝えすることができることによって一安堵したいと思います。

☆今回の創刊号発刊につきましては、掛川会長、小林副会長、森崎先輩の多大な御協力をいただきました。又、印刷に関しては、四回卒の吉村末広先輩の物心両面における御援助を仰ぐことになりました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

☆母校からは、竹下校長の御寄稿と、写真などの提供をうけました。改めて感謝の意を表明するとともに、母校の発展を心から祈りたいと思います。

☆又、御投稿いただいた同窓生は、短期間

編集後記

にもかかわらずみな快よく御協力いただくことができました。有難うございました。

☆この「ニュース」の愛称は、とりあえず、「コミュニティ」としましたが、よりよい名前がありましたら、御意見をお寄せ下さい。皆様方の総意で素晴らしい愛称を確定していきたいと思っております。

☆創刊号に対する御意見、御希望がありましたら、どんどんお聞かせ下さい。又、母校や故郷の思い出、現在考えておられること、何でも結構ですから、原稿をお送り下さい。皆様の力で、楽しく実りのある交流紙に育んでいきたいと思っています。

☆私たちの悪い風邪が流行っています。くれぐれも御自愛されて、一層の御活躍をなされるようお祈りします。
(一九八三年二月十五日 寺井記)



